

床も心もバリアフリー

長町集真藍工房主 吉村彰雄さん(74)



「外へ出ればバリアだらけ。どこにおっても苦勞はするから。できないことを考えるんでなく、できることをしてあげたい」。和風建築の床座の生活は、不便というよりむしろ、2人を優しく包んでくれているようだ。

武家屋敷ふうに見えるが、もともとは旧松任市にあった農家建築である。大工だった彰雄さんの祖父が1902(明治35)年に建て、大正期に移築した。「ここが生まれたんや」と彰雄さんがふすまの向こうを指さす。幼い頃から、人の出入りが絶えない家だった。書道や和裁教室が開かれ、学生向けの下宿も営んでいた。彰雄さんは金大から阪大大学院へ進んで故郷を離れ、そのまま定年まで理学部で講師を務めた。大阪の茨木市で家も購入したが、

気がかりは金沢の生家だった。長く空き家になっていた家に、一花咲かせてやりたい。「再び人が集まる家になれば、家も喜ぶだろう」と20

武家屋敷が立ち並ぶ長町の大野庄用水沿いに、長町集真藍工房はある。訪ねるとスロープのついた玄関先で吉村彰雄さん(74)雪子さん(62)夫婦がふくふくした笑顔で迎えてくれた。

4歳の時に脊椎カリエスを患ったという彰雄さんは、長く車いすに頼る生活だ。家の中は車いすも使えるが、日々は床を這う暮らしを選んだ。手や膝をつけて歩く床にはフロアマットを敷き詰めて快適にしてある。

長く空き家になっていた家に、一花咲かせてやりたい。「再び人が集まる家になれば、家も喜ぶだろう」と20



笑顔で来訪者を迎える吉村さん夫婦
—金沢市長町3丁目

09年、市の支援で工房に再生した。工房の名前は「集」の字が気に入って、紫陽花ではなく「集真藍」とした。彰雄さんの藍染め、雪子さんの九谷皿が並ぶ工房では、毎月1度「居酒屋」も開く。ジャパントのホストファミリーとして8年間、留学生を受け入れたこともある。軒先で始めた駄菓子屋に、近所の子どもやおばあちゃんがやってくるのも楽しい。

年齢も、肌の色も関係ない。多彩な色の小花が集まって咲き誇るアジサイのように、色んな人がやってくる。誰もが垣根を飛び越えて訪れる「バリアフリー」の家で、客人を迎えていく。

断熱材を入れるなどすれば十分に安全、快適に住むことができる。吉村家は、町家の良さを活かしながら改修、活用を行ったモデルとして、ぜひ参考にしてもらいたい。

識者の



川上光彦金大名誉教授

町家は高齢者や障害を持つ方には暮らしにくいと思われがちだ。だが、玄関の段差を解消したり、建具や壁の補修、